

提 言

失敗学会では、人命に関わったり、多大な経済的損失を生じさせたりするような事故や失敗が出来たとき、現場をそのまま保存し、次世代の人たちが学ぶことができるように展示することが、事故や失敗を引き起こした私達世代の責務であると考えます。そのために、広く社会一般に呼びかけて、世代を超えて失敗に学ぶための『失敗体験館』を実現し、その中で事故や失敗の現場を保存することが失敗学会の最重要課題の1つであると考えます。

2004年12月24日

失敗学会会長 畑村洋太郎

「提言」の動機

1999年のJCO臨界事故から5年が経過した今、刑事裁判も終結し、地元住民の間ではJCO敷地内に残された事故現場を一刻も早く撤去して欲しいという声の一部に起こっています。被害に遭われた方やその御遺族が、事故当時やその後の苦痛を思い出させる事故現場が消えれば良いと願う気持ちは十分理解できますし、同情を禁じ得ません。

しかしながら失敗学では、将来同じような原因によって起こり得る臨界事故を防ぐために最も有効な情報伝達方法は、現物の保存において他にないと考えます。写真、ポスターや模型では、見る者に直接的に訴えかける力が十分ではありません。失敗を防ぐために効果的な展示は、例えば、三菱重工業長崎造船所のタービンローター事故の展示や関西電力美浜発電所の蒸気管損傷事故の展示に見ることができます。

世界の臨界事故はおよそ20年周期で発生しており、それまで臨界事故のなかった日本も1999年からこの大きな世界周期の仲間入りをしたわけです。このままこのJCO臨界事故から目をそらす形で事故現場を消滅させてしまえば、20年後の2020年頃には同じようなシナリオの臨界事故が起こる可能性が増大します。

事故を起こした当事者が、国、自治体や近隣の理解と援助を受けて事故現場を保存し、失敗に至る経緯を後世に伝えることは、義務であると同時に、亡くなられた方やその御遺族および地域住民の方々を含めて被災された方々への最大の償いになると確信しています。

2004年3月に事故を起こした東京六本木の森ビルの回転ドアについても同じことがいえます。司法的な取扱いは未定ですが、その方向が決定した時点で、法律的には現場の撤去が可能になると考えられます。あのような痛ましい事故が起こった最大の原因としては、もともと軽かった回転体が日本に渡来するときに立派な重い物に変わってしまったという“技術の系譜”の問題があると考えられます。このようなことはどの分野にも起こっていることで、技術の変遷の上で注意しなければならないことがこの回転ドアの事故には刻み込まれています。

事故に遭われた方の御遺族やこの建物を使用している人たちからすれば、苦痛を呼び覚ます事故現場の一刻も早い消去が望まれるかもしれませんが、将来起こり得る同種の事故を防ぐ最良の方法が、事故を起こした実物の保存であることは疑う余地がありません。

以上のような考えから、臨界事故の現場や回転ドア事故の実機の保存等を是非とも実現したいと考える次第です。